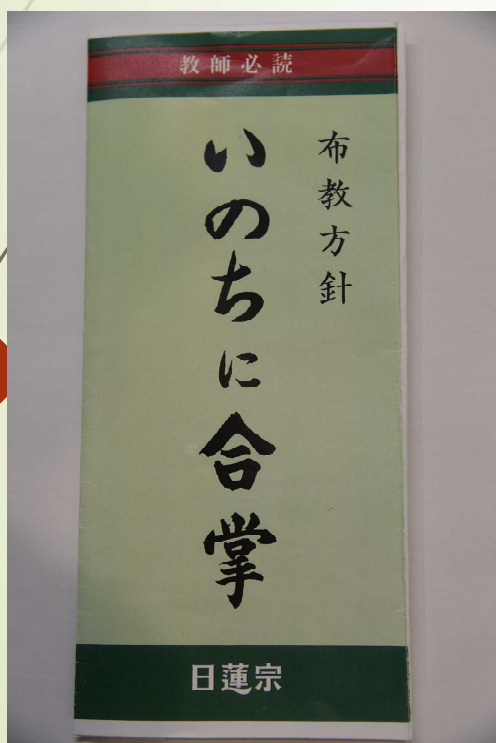


今、いのちとは何かを考える



「心といのちの講座」 令和5年3月2日

古河良皓

令和4年度 布教方針『いのちに合掌』より

大曼荼羅ご本尊の世界に到達するイメージ 4つの道筋を提示

- 一切衆生悉有仏性
- 但行礼拝
- 不輕菩薩の振る舞い
- お題目の下種・結縁
- ほかの道筋





『いのちに合掌』の「いのち」について

すべての生物や自然環境には、それぞれの「いのち」があり、その営みがあります。

すべての「いのち」は仏様になる可能性を持った尊い「いのち」です。ご一緒に「いのち」について考えてみましょう。

(令和4年度 布教方針より)

布教方針について

- ①布教方針としての『いのちに合掌』と、4つの道筋の関係がわかりにくい。
- ②『いのちに合掌』の「いのち」について、すべての「いのち」は仏様になる可能性を持った尊い「いのち」とあるが、成仏の可能性があるので尊いのか？いのち自体が尊いのではないか？
- ③日蓮宗として唱える「いのちに合掌」であるならば、法華経と日蓮聖人の教えに説かれた「いのち」、「生命観」を説き示すことが大切だと考える。

法華經の教えに見る生命観

1、法華經經文中に示される輪廻

「我知んぬ。此の衆生は未だ曾て善本を修せず。堅く五欲に著して癡愛の故に悩を生ず。
諸欲の因縁を以て三悪道に墜墮し、六趣の中に輪廻して備さに諸の苦毒を受く。」

（『方便品』）

「舎利弗よ、われは昔、汝をして仏道を志願せしめたりしに、汝は今、悉く忘れて、便ち自ら已に滅度を得たりと謂えり。われは、今、還つて汝をして、本願によりて行ぜし所の道を憶念せしめんと欲するが故に、諸の声聞のために、この大乘經の、妙法蓮華・菩薩を教える法・仏に護念せらるるものと名づくるを説くなり。

舎利弗よ、汝は未来世において、無量、無辺、不可思議の劫を過ぎて、若干の千万億の仏を供養し、正法を持ち奉り、菩薩の行ずる所の道を具足して、当に仏と作ることを得べし。」

（『譬喩品』）

2、『如来寿量品』に説示される本仏釈尊の久遠の生命（五百億塵点劫）

「汝等よ、諦かに聴け、如来の秘密・神通の力を。一切世間の天・人及び阿修羅は、皆、今の釈迦牟尼仏は、釈氏の宮を出でて、伽耶城を去ること遠からず、道場に坐して、阿耨多羅三藐三菩提を得たりと謂えり。然るに善男子よ、われは実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり。譬えば、五百千万億那由他阿僧祇の三千大千世界を、仮使、人ありて抹りて微塵となし、東方五百千万億那由他阿僧祇の国を過ぎて、乃ち一塵を下し…」

「諸の善男子よ、如来は諸の衆生の、小法を楽しめる徳薄く垢重き者を見ては、この人のために、われは少くして出家して阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説くなり。然るに、われは実に成仏してより已来、久遠なること斯の若し。」

「我、仏を得てより来、経たる所の諸の劫数は、無量百千万億載阿僧祇なり。常に法を説きて、無数億の衆生を教化して仏道に入らしむ、爾より来、無量劫なり。」

久遠本仏の永遠の生命

- ▶ 法華経の教主、久遠の本仏釈尊の生命は、永遠である。(如来寿量品一久遠実成)
- ▶ 法華経の本門では、ブッダガヤで成道した釈尊は、実はそれよりはるか以前、永遠の昔に計り知れない修行を積み、すでに悟りを開いていた仏陀であり、歴史上の釈尊は人々を救う目的のためにこの世に姿を現したものである。その入滅も、人びとの慢心怠惰の心をいましめるための教化の手段であって、仏陀としては未来永劫、人びととともに生き続けるという、仏陀の超歴史的本体を説く。

* イギリスのリバプール大学の研究チームは、量子重力理論の一つである因果集合理論によって、宇宙に始まりはなく無限の過去が存在していたという結果を得たという。一つの仮説だが、久遠の本仏の教えに通じる一面がある。

3、久遠本仏と私たちとの関係

(1)父子の関係―『譬喩品』

「われは、衆生の父なれば、応にその苦難を抜き、無量無辺の仏の智慧の樂を与え、それに遊戯せしむべし。……」

「われも、亦、かくの如し。衆聖の中の尊にして、世間の父なり。一切衆生は、皆、これ吾が子なるに、深く世の樂に著して、慧心あること無し。」

「今、この三界は、皆、これわが有なり。その中の衆生は、悉くこれ吾が子なり。しかも、今、この処は諸の患難多く、唯、われ一人のみ、能く救護をなすなり。…」

「舎利弗に告ぐ、『汝、諸人等は、皆、これ吾が子なり。われは則ちこれ父なり。汝等は累劫に、衆苦に焼かるるをもって、われは皆、濟抜して、三界を出でしめたり。』」

(2)良医治子の比喻による父子の関係―『如来寿量品』

「譬如良医 智慧聡達 明練方薬 善治衆病 其人多諸子息…」

4、弘教・求道と不惜身命の覚悟

我不愛身命 但惜無上道 「勸持品」

一心欲見仏 不自惜身命 「如来寿量品」

百福莊嚴の臂を燃すこと、七万二千歳にして
以て供養す (焼身供養) 「薬王菩薩本事品」

※捨身供養 ジャータカ(本性譚)・ 捨身飼虎など

5、連続するいのちの営み

人生の目的と本仏の誓願

人間として生を享けたのは、「衆生を愍むが故」(法華経法師品)である。私たちは、すべての生きとし生けるものを等しく仏にするという久遠本仏の誓願(方便品)を満足せしむる使命を担って、この世に生を享けている。

地涌の菩薩の自覚

そのような使命にめざめ、自覚した者こそ、法華経を末法に流布する地涌の菩薩である。(仏子の自覚から、地涌の菩薩へ。菩薩行の実践)

日蓮聖人の説く生命観

(1)生命の尊重(尊厳)

いのちと申す物は一切の財の中に第一の財なり。遍満三千界無有直身命と
とかれて、三千大千世界にみて候財をいのちにはかへぬ事に候なり。

『事理供養御書』P1261

命と申す物は一身第一の珍宝也。一日なりともこれをのぶるならば千万両の
金(こがね)にもすぎたり。法華経の一代の聖教に超過していみじきと申すは
寿量品のゆへぞかし。閻浮第一の太子なれども短命なれば草よりもかるし。
日輪のごとくなる智者なれども夭死(わかじに)あれば、生犬(いけるいぬ)に
劣る。早く心ざしの財をかさねて、いそぎいそぎ御退治あるべし。

『可延定業御書』P862 ~ 863



(2) 不惜身命

仏になる道は、必ず身命をすつるほどのことありてこそ、
仏にはなり候らめとおしはからる。

『佐渡御勘気抄』P510

百二十まで持て名をくたして死せんよりは、生きて一日
なりとも名をあげん事こそ大切なれ。

『崇峻天皇御書』P1395

(3) 生死無常・老少不定

かしこきも、はかなきも、老いたるも、若きも定め無き習いなり。

されば先ず臨終の事を習うて後に他事を習うべし。『妙法尼御前御返事』P1535

(4) 永遠の久遠本仏と私たちとの関係

九界も無始の仏界に具し、仏界も無始の九界に備て、真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし。『開目抄』P552

法華経は釈迦牟尼仏なり。法華経を信ぜざる人の前には、釈迦牟尼仏入滅を取り、此の経を信ずる者の前には、滅後たりといえども仏の在世なり。『守護国家論』P123

釈尊の因行果徳の二法は、妙法蓮華経の五字に具足す。我等此五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与えたまふ。『観心本尊抄』P711

今本事の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり。仏既に過去にも滅せず、未来にも生ぜず、所化以て同体なり。此れ即ち己心の三千具足、三種の世間也。

『観心本尊抄』P712

日蓮聖人の説く死生観

(1) 臨終正念・煩惱即菩提・生死即涅槃

相構(あいかまえ)相構て強盛の大信力を致して南無妙法蓮華經
臨終正念と祈念し給へ。生死一大事の血脈此より外に全く求めること
なかれ。煩惱即菩提、生死即涅槃とは是なり。 『生死一大事血脈抄』P524

しかれば故聖霊、最後臨終に南無妙法蓮華經ととなへさせ給ひしかば、
一生乃至無始の悪業変じて仏の種となり給ふ。煩惱即菩提、生死即涅槃、
即身成仏と申す法門なり。 『妙法尼御前御返事』P1537

(2) 死後の安心

日蓮が流罪は今生の小苦なればなげかわしからず。後生には大楽を得べければ、大いに悦ばし悦ばし。 『開目抄』P609

(3) 後生善処・靈山往詣

乞願わくは、一見を歴(へ)るの末輩、師弟共に靈山浄土に詣でて三仏の顔貌を拝見したてまつらん。 『観心本尊抄副状』P721

我法華經の信心をやぶらずして、靈山にまいりて返てみちびけかし。 『開目抄』P605

万事靈山浄土を期す。 『富木殿御返事』P620

法華経と日蓮聖人の教えにもとづく生命観

久遠本仏の永遠の生命

法華経の教主、久遠の本仏釈尊の生命は永遠である。

「如来寿量品」

仏子としての私たちの生命


私たち人間を含め、あらゆる生きとし生けるものの生命は、
み仏の子として久遠本仏から授かったものである。それゆえ、
あらゆる生命は久遠本仏の永遠の生命に連なり、等しく尊く、悉く成仏する。

「譬喩品」

連続するいのちの営み

人生の目的と本仏の誓願 「法師品」

地涌の菩薩の自覚



現世の安心

信心の決定とは、自己を久遠釈尊の永遠の生命の中にみることである。
従って現在の安心は三世の安心にほかならない。

(日蓮宗事典より)

「いのちに合掌」から、「輝けいのち」へ

人身は受けがたし、爪の上の土。人身は持ちがたし、草の上の露。
百二十まで持て名をくたし(腐)て死せんよりは、生きて一日なりとも
名をあげん事こそ大切なれ。中務三郎左衛門の尉は主の御ためにも、
仏法の御ためにも、世間の心ね(根)もよ(吉)かりけりよかりけりと、鎌倉
の人々の口にうたはれ給へ。あなかしこ。あなかしこ。

『崇峻天皇御書』